

採、線路工事、貨物船の荷役、れんが焼き、どれをとっても健康なソ連労働者のノルマは、栄養失調でフラフラとした半病人のような日本人にはとても一〇〇%達成などできるはずがありませんでした。例えば、穀物の積みおろしでも、一袋の重量は自分の体重よりはるかに重いものばかりでした。なかでも一番つらかったのは冬期の夜間作業です。真夜中、普通列車が通らない時間帯に、バラスを積んだ貨物列車が来て、我々をたたき起こして列車に乗せて現場まで行き、次の列車の通過時刻までに終わるようなのしられながらせき立てられることでした。伐採作業にしても、夏の森の中は大変むし暑く、蚊やブヨに攻められながら、切れない鋸で必死にノルマに挑戦しました。冬は凍りついた鋸やタポールを持って、自由に動けない雪の中でくたくたになるまで働かされました。やっと作業が終わり、帰り道には、直径十五センチから二十センチ、長さ二メートルぐらいの重たい木を担ぎ、長い凍りついた道をただうつつむいて、前の人の足元だけを見ながら歩くだけでした。

デモクラシーの教育は、旧軍隊の階級章をはずすこと

から始まりました。働くものは主人公であるということ  
を徹底的にたたき込まれました。この教育は二十三年ごろからほとんど毎晩のように行われるようになりました。

引揚船の中で一番思い出すのは、食中毒に見舞われた  
ことです。二十四年の明優丸の引揚者、ソ連での抑留生  
活が長かったためか、割合に洗脳された団結心が強かつ  
たように思います。それが後日になっていろいろと災い  
のもとになり、就職するのにも死にたい思いをしたこと  
もありました。まだまだつらかった思い出がたくさんあ  
りますが、ひとまずこのぐらいで終わらせていただきま  
す。

—— どうもありがとうございました。

### ナホトカ第三収容所への道遠し

和歌山県 宮本 彰

—— では、引き続きまして、宮本彰さんの体験談を

お聞かせいただきます。どうぞよろしく。

終戦時の所属部隊は、チャムスにある第一〇飛行場大隊でございます。そのときの階級は少尉で、ポツダム少尉というあだ名があるように、終戦になって少尉になりました。

終戦の場所は、満州のハルビンでございます。チャムスから八月十四日に汽車に乗りまして、十五日に着きました。ハルビンから牡丹江まで行って、そこで汽車に乗せられて約一か月後に収容所に着きました。そこでしばらくいて、ラーダからエラブカ、これは囚人と捕虜の町だったそうです。帰国のときの乗船地は、ナホトカから昭和二十二年十一月に乗りまして舞鶴に着きました。帰国後の職業は、帰りましたときに父がポンプ業をやっておりますので、それを手伝いました。それから、ガス工事、また会社勤めなんかをいたしました。現在は、和歌山の南海ラバーという、コンデンサーのゴムのパッケージをつくっております。

終戦から入ソ初期の苦労は、ハルビンで終戦になりましたので、汽車に乗せられて牡丹江に向けて発車したん

でございますが、途中で汽車が追突いたしました。そのために、牡丹江の一つ手前の海林というところの弾薬庫の跡まで、夏の暑い中、水のないときに、歩かされた。歩いていると、戦車の壊れたのとか、死んだ人の埋めた場所とか、馬がひっくり返って死んでいるというところを線路づたいに牡丹江まで行きました。

ソ連に連れていかれて、一番困ったのは食べるものがない。一番みんなが希望するのが食堂の勤務だったんですけれども、じゃんけんにかけて行けなくて、それで食べるものがない。特に別の小さい収容所に行ったときなんかはもうほとんど食べるものがない。それで、野外作業に行くときに、草をつまんで、これは食べられるやろうという草をいっぱいにとって帰ってきて、それを塩水でたいて、そして食べた。そうすると自分の便が緑色になるんです。そこまで草を食べました。笑いキノコなんか食べた人は一日中笑っているという状態でございます。

労働の実態は、伐採に行ったときは、私は靴屋をやったおかげであまり苦労というのはなかったんですけど

も、ほかに鉄道の路盤工事をやらされたわけです。そして、自分で掘って、その掘った土を路線をつくるところに持って行って、それで帰ってきてまた掘って、ターチカで土を運ぶわけです。それで、そのノルマが初めが二立米やったわけです。一メートル幅で一メートルの深さに掘って、二メートル掘った土を、あとから測量にくるんです。その寸法をはかってその量がでてこなかったら、また掘られる。それが二立米だったら、日本人はばかだからパッパッパッと掘ってしまって、それで休むわけです。そうしたら、こんなに遊んでいたらいかんと。次は四立米。だんだん伸びて、最高は十二立米。一メートルの深さ、一メートルの幅で、十二メートル向こうまで掘らなさいかんとというノルマが課された。それで、我々はどう頭にきて、こんなことやってたらあかんということでもサボったような状態にして、結局四立米は定量にやったわけだ。それだったら一日掘ったらどうにかこうにかできるノルマやったわけです。

その次の統制管理の実態、洗脳の実態というのは、収容所にいるときは、私たちは将校が主だったので、収容

所の中ではなかったですけども、ナホトカに着いたときにまだ階級章をやっていたわけです。すると、その収容所の人が来て、怒って階級章をもぎとったわけ。それからナホトカの収容所というのは、第一、第二、第三とあって、それで初め第一に入れられるんです。それから第一から第二になかなか行けないわけです。第二へ行ったらもうすぐ帰れるという状態だけでも、それで「どうしてなあ」と言ったら、もう我々は階級章をつけて、共産主義に向かないということで、一つも第二に連れていってくれない。そのためにみんな署名運動をしたわけです。帰ったら共産黨員になりますと書いて、署名して持っていったわけです。そうしたら、すぐ第二に連れて行って、第二だったら、楽団が来て慰めてくれるという状態だったわけです。そして、第二から第三へ行って船に乗るんですけれども、出たのが昼前なんです。昼前に出て、昼第三で食事するというのを食べさせてくれんと船へ放り込まれちゃう。それだけ一食第三で飯をぬかれただけです。そういう状態やったわけ。それでやっとここさ船に乗れたということです。

ナホトカで船に乗ったときに、港の中はよかったんですけれども、一歩外に出たときには物すごく風があつて、大きな波の中を船に乗ってきたわけです。それで、船の中ではもうみなおびてしまつて、酔つて、もう話をするどころの騒ぎではなかつたわけです。それで、どれだけの風があつたかという、あとから聞いた話ですけれども、ナホトカから舞鶴に着く所要時間の半分近く早く着いたんです。それだけ風があつて、船の中の状況というのはみな話をする状態ではなかつたわけ。それでやっこさ舞鶴に着いて、ひょっと見たら緑色の山が見えるわけです。そのときのうれしさはもうたまらなかつたです。

—— どうも長い時間ありがとうございました。

## 痛恨シベリア抑留

石川県 永井正三

—— これからの人は、ダモイということで汽車に乗

せられたわけです。それで、それは内地へ帰れると思つて信じていたけれども、着いた先がシベリアだった。その間の心境をもうちょっと詳しく話してほしいんです。

私は、昭和十六年七月の関特演で二度目の召集を受けまして、牡丹江の第九師団歩兵第七連隊へ再び入隊いたしました。牡丹江には終戦まである特別の勤務でおりまして、自分の原隊は沖繩へ行つて、それから終戦を台湾で迎えて、事なきを得て皆さんは帰ってきたんですが、私一人牡丹江へ残りまして、日本人の中学校の教師に部隊から派遣されて、軍服のままで応召されました。

関東軍の将校の子弟をあずかる中学で、終戦のときに牡丹江から逃げまして、通化にさがつておりました関東軍司令部へ逃げ込みまして、とりあえず司令部付きになり、終戦後参謀長が通化で山のような書類を焼いているのを目撃いたしました。新京で一か月軟禁されまして、それから千人単位の部隊に編入されました。見も知らない新京警備部隊という臨時の部隊にたった一人で編入されました非常に困りました。これがまた八月一日に召集